

自然とともに、生き抜く

関西・知恵のフィールドノート

(写真右上から時計回りに) 日本初のX線自由電子レーザー(XFEL)施設、清水だけに育つバイカモ(滋賀県)、京速コンヒーター「京」、京都府の夢絵峠付近の風景、関西国際空港から飛び立つ旅客機、市民の努力で往時の美しさを取り戻した八幡堀(滋賀県近江八幡市)



関西産業特集

混迷する時代／共生、未来切り開く道しるべ

昨年、東日本を襲った大震災。そしてタイにおける大洪水。人知を超え自然の猛威を前に、我々の文明が微妙なバランスの上に成り立っていることをあらためて思い知らされた。円高や、政治・行政の混迷などもあって、先が予測しにくい状況は続いている。だからこそ、これから生き抜くための知恵が今、切実に求められている。

大いなる自然の前に、我々は無力。だが、自然をうまく使いこなす、ともに生きることができれば大きな力になってくれる。共生は新たな未来を切り開く道標となるのではないだろうか。地球環境を守りながら産業の活力を持続することで、文明を繁栄へと導く。自然と産業との共存・共生によって、これも可能となるはずだ。

関西には自然と産業が共生する手本になる例が豊富にある。天然由来の恵みを組み合わせて役立ててきた医薬品業界、自然の知恵をヒントに機能化を進めてきた繊維産業、本草学をルーツのひとつとする実用学問の伝統は、関西に集積する大学・研究機関に今も思いついている。そして、水素の利用に代表される新エネルギー産業も自然と上手につきあつことの延長上にあるといえる。

日本経済の力は「東高西低」と言われて久しい。ただ、関西の企業は「自然を巧みに取り込んで新たに創造し、しなやかに生き抜いてきた」。こうした関西の知恵は、決して枯れてはいない。むしろ自信を失いつつある日本経済の指針ともなりうる。戦後から高度成長期にかけて、重厚長大産業は日本の産業を象徴する存在だった。この中で老舗といわれる関西のメーカーは今、環境事業を手がける企業へとみごとに転身している。こうした革新を続ける粘り強さと、しなやかな身のこなしは、まさに関西ならではの強みだ。

今回の特集では、関西エリアに存在する、自然と生き抜く知恵を集めて紹介する。

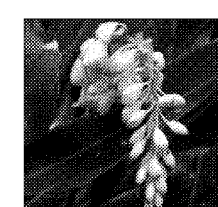
再利用! エコ・ファッション!!



ECO技、クラボウ。

技の解説 ④

- 沖縄の植物「月桃」の茎を再利用して、綿との混紡で糸や生地にする。
- 素材は清涼感があって発色がよく、夏のエコ・ファッションに最適。
- 捨てていた茎を使い廃棄物低減、資源有効利用に役立っています。
- 沖縄の「かりゆしウェア」の素材として、地域産業の振興にも貢献。



クラボウ・繊維事業部は、竹などの天然素材を解きほくしてわた法にする「開織」技術も豊富に蓄積。沖縄の代表的植物「月桃」は葉に抗菌・防虫性があり、食品、化粧品などの商品化が進んでいます。使うのは葉だけで茎は廃棄されていました。クラボウは開織技術を月桃にも応用して、綿との混紡による糸、生地の商品化に成功。廃棄物の低減と資源の有効利用を両立。「かりゆしウェア」の素材として沖縄の産業振興にも貢献しています。 ※「かりゆし」は、(社)沖縄県工業連合会の登録商標です。

廃棄されていた茎で、地域産業にも貢献
＜新天然繊維素材・クラボウ月桃®＞

ECO技クラボウ

検索